

タンパク質動態研究所 開設記念シンポジウム

2016年10月26日、タンパク質動態研究所の開設記念シンポジウムが京都産業大学神山ホールで開催された。「タンパク質のゆりかごから墓場まで」と銘打たれたこのシンポジウムでは、学内からは、元京都産業大学総合生命科学部教授であり現シニアリサーチフェローの伊藤維昭、吉田賢右両氏が、また、学外からは、三原勝芳氏（九州大学名誉教授）、藤木幸夫氏（九州大学特任教授）、田中啓二氏（東京都医学総合研究所所長・タンパク質動態研究所招聘教授）、大隅良典氏（東京工業大学栄誉教授・タンパク質動態研究所招聘教授）が招かれ、永田和宏氏（京都産業大学教授・タンパク質動態研究所所長）のコーディネートのもとに講演会が行われた。



本シンポジウムは、計画当初、研究者向けの比較的小規模な講演会として京都産業大学の図書館ホールにて行われる予定であったが、講演予定者の一人、大隅良典氏のノーベル生理学・医学賞の受賞決定という喜ばしいニュースを受け、急遽、収容人数の多い神山ホールに会場が変更され、また、第一部を研究者向け、第二部を一般向けという二段構成での開催となった。シンポジウムの情報発信は、学内で10月6日に開かれた記者会見の場で行われたが、その情報がテレビや新聞などで報道されると、インターネットによる参加申込みが殺到し、記者会見の翌日には一般向けの参加申込みは締め切りとなった。大学広報や研究機構の事



務スタッフは事前準備に大変な思いをされたものと想像するが、迅速かつ柔軟な対応の甲斐もあるうか、シンポジウムの当日には、地元の高校生から京産大生、一般参加者、研究者など合わせて1200名が集まり、多数のマスコミ関係者も加えて会場の神山ホールは大変な賑わいとなった。

研究者向けの第一部では、まず、伊藤維昭氏が登壇した。「タンパク質誕生の真実」という演題で、合成されつつある新生タンパク質がみせる興味深い振る舞いやその生物学的な意義について、最新の研究成果を発表された。次に、吉田賢右氏は、「分子シャペロン・タンパク質の立体構造形成を制御するタンパク質」という演題で、タンパク質のフォールディングにおけるシャペロニンの役割と分子メカニズムについて発表された。三原勝芳氏は、「ミトコンドリア融合・分裂の機



構と生体機能調節」という演題で、ミトコンドリアの動態とそれを制御するタンパク質についての最新の知見を発表された。藤木幸夫氏は、「ペルオキシソームの恒常性と障害の分子基盤」という演題で、ペルオキシソームの機能維持に関わるタンパク質についての最新の知見を紹介された。最後に、田中啓二氏は、「免疫型プロテアソーム～「自己と非自己」識別の根源に迫る！～」という演題で、獲得免疫の形成における免疫型プロテアソームの役割について、大変興味深い知見を報告された。



第二部は研究者以外の一般の方にも公開され、メインイベントとして大隅良典氏の特別講演があった。オートファジー研究を通じて基礎研究にその身を捧げた一人の研究者の姿をひとつのケーススタディーとして示された大変示唆に富んだご講演となった。本シンポジウムは、大隅先生にとっては、ノーベル賞受賞決定後初の一般講演であったこともあり、ご来場いただいた方々にとっても大変貴重な機会になったのではないかと想像する。

実は、この第二部では、大隅先生のご講演に先立って座談会が行われ、大隅氏の研究仲間でもある第一部の演者の先生方や、本シンポジウムのコーディネーターの永田和宏氏らが、大隅先生との交流や個人的なエピソードなどをご披露された。例えば、伊藤維昭氏は、修士課程の時代に生化学若手の会で大隅氏と初めて出会い、一緒に山登りをさ

れた時の写真を披露された。一学年後輩の大隅先生を先導して山登りをする学生時代の自身の写真を指し、



「この頃はまだ私が大隅さんをリードしていました」と言って会場を沸かせていた。本シンポジウムの演者と永田和宏氏を含めた七名は、「七人の侍」という飲み仲間(?) 集団を結成し、定期的に集まって飲みながら語り明かす会を重ねてきた。「七人の侍」のメンバーによる座談会は、研究仲間から見た大隅先生の等身大の姿を垣間見ることのできる大変ユニークな機会でもあったかと思う。

本シンポジウムでの講演や座談会を通じて、大隅先生を始め演者の先生方が、基礎研究の社会的重要性や基礎研究とともに生きることの魅力を伝えようとしていたように思う。基礎研究者の一人として、講演者の思いが少しでも多くの来訪者、特に、高校生や大学生などの若い人たちに響いたことを願い、また、基礎研究が人々の生活の一部としてより親しまれる社会になること願いつつ、「タンパク質動態研究所開設記念シンポジウム」の報告記の結びとしたい。

文責 千葉志信

